



セミナーを熱心に受ける先生たち



●モーツァルト先生
(1756~1791)

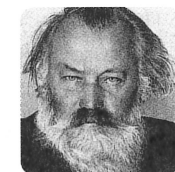
1781年、ザルツブルクでの有名な大司教とのケンカの後ウィーンに出てきたモーツァルト。このとき史上初の「ピアノ教師」が誕生したのかもしれない。しかし当初は「生徒が1人いたのに3週間も休んだので収入がなかった」と日記に書くほどの生活。のちに大ピアニストとなるフンメルを8歳で弟子にし、モーツァルトは指使いを大切にしていた。



●ベートーヴェン先生
(1770~1827)

筆頭弟子はチエルニー(10歳くらいで弟子になった)。甥のカールがチエルニーにピアノを習うようになったとき、ベートーヴェンは、正しい指使い、正しい拍子、譜面どおりにだいたい弾けるようになってから曲想を教える。欲しいなどと頼んでい

ンをおこなった。特に「指を3本使うトリル」の指使いは、フンメルからタールベルクに伝わり、「ハノン教本」にも記載されている。



●ブラームス先生
(1833~1897)

ブラームスの必携アイテムは「親指」。親指の使い方を徹底的に指導し、ブラームスふうハノンともいえる「51の練習曲」を作曲。トリルを正確に弾くための練習曲も含まれている。



講師: 岳本 恭治

Profile

ピアニスト、音楽ジャーナリスト。武蔵野音楽大学音楽学部器楽学科有鍵楽器専修ピアノ専攻卒業。国立音楽院ピアノ調律科にて学ぶ。ロンドン・トリニティカレッジグレード演奏家ディプロマを最優秀の成績で取得。NHK-FM放送をはじめ、数多くのコンサートやリサイタルを開催する。演奏活動と共に、研究者としても活躍、講演、レクチャー、執筆をおこない好評を得ている。日本におけるJ.N.フンメル研究の第一人者。現在、日本J.N.フンメル協会会長。

ピアノ教師でもあった 大作曲家たち

モーツァルトはピアノ教師のルーツ!

6月14日 東京・東音ホール

取材・構成: 荒木 淑子

写真提供: 社団法人全日本ピアノ指導者協会

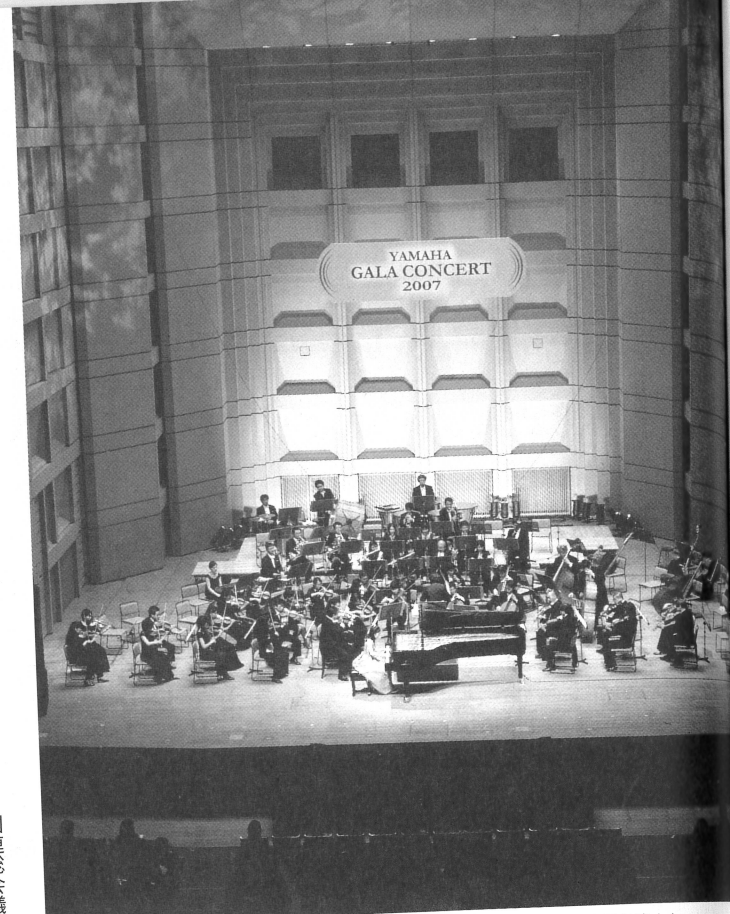
ピアノの構造・奏法史などの研究で知られる岳本恭治による講座「ピアノ教師でもあった大作曲家たち—6人6様のピアノ・レッスン—」が、音楽教材研究会の主催でおこなわれた(協力: 社団法人全日本ピアノ指導者協会)。

モーツァルトやショパンがピアノ教師として生計を立てていたということは、案外知られていないのではないだろうか。約300年前に誕生した「ピアノ」は構造の移り変わりとともに奏法も変化し、それにつれてレッスンの内容も変わってきた。膨大な文献の中から、大作曲家たちのレッスン風景を浮かび上がらせた今回のユニークな講座。そのごく一部を紹介しよう。



●シヨパン先生
(1810~1849)

パリに出てきてからは、おもに貴族の女性にピアノを教え、シヨパンはその収入で生計を立てた。弟子の数は1300~1500人。



のびやかな演奏が印象的だった三重野奈緒さん

みずみずしい感性 の響き渡った一夜 ヤマハ・ガラ・コンサート 2007

~ヤマハ音楽教室から生まれ育つ、
若き音楽家たちの祭典~

6月7日(木) Bunkamura オーチャードホール

取材・文= 荒井幸太

写真提供= ヤマハ音楽振興会

YAMAHA GALA CONCERT 2007

ヤマハ音楽振興会が長年にわたり展開してきた音楽普及・教育活動であるユニバーサルコンサート(JOC)、ヤマハオリジナルコンサート(JOC)、ヤマハエレクトーンコンクール(YEC)、ヤマハマスタークラス。そこで育まれた才能が一同に集う「ヤマハ・ガラ・コンサート」が今年も開催され、9歳から15歳までの若い音楽家たちが、ピアノ・ソングをはじめエレクトーン・ソングやアンサンブルなど、多彩な編成でオリジナル作品の演奏を披露した。

開演に先立って、今年4月に逝去したチエロ奏者・指揮者のムステイスラフ・ロス・トポヴィチ氏を悼む映像を上映。JOCの趣旨に共鳴した同氏は、1981年、自ら率いるナショナル交響楽団とJOCの

コンサートをニューヨーク・国連総会議場で実現させ、大きな喝采を浴びた。また、ヤマハマスタークラスを提唱し、自らも直接指導にあたった。このような情熱が、子どもたちのみずみずしい感性を開花させるための大きな支えとなっていたことは疑いがない。

さて(第一部)は、川本さくらさん(9歳)が作曲した《組曲「のらねこたちのダンスパーティー」》で幕開け。姉の川本夢子さん(12歳)との共演によるピアノ連弾である。ちょっと大人びたステージマナーと、姉妹ならではのびったりした呼吸合わせで、愛嬌たっぷりの「ダンスパーティー」を楽しませてくれた。

そのほか、斉藤直樹さん(15歳)が、リストの《タランテラ》を参考にしながら自らのモチーフを發展させた《タランテラ》、YEC2006エイジグループIIで第1位を受賞した井上薫さん(14歳)による《Change Over》など、バラエティ豊かな内容。とくに、子どもたちが自らの作曲と演奏をもって示したエレクトーンという楽器の表現領域の広さには、つくづく驚嘆させられる。

休憩をはさんでの《第二部》は、日本フィルハーモニー交響楽団との共演(指揮: 沼尻竜典)。まず、三重野奈緒さん(12歳)が、《協奏曲「ある森の中で」》のピアノ・ソングを、のびやかに気持ちよさをうた演奏。客席に清々しい風を送り込む。

そして最後に、ピアニストの三浦友理枝さんが特別出演。曲目は、ラフマニノフの《ピアノ協奏曲第一番》である。ヤマハマスタークラスの卒業生でもあり、現在は英国王立音楽院大学院に在籍中の三浦さんは、すでに各地でのコンサートやCD録音でも活躍中で、最近では映画「神童」に出演し注目を集めた。この日の曲目は、彼女が高校生のとき初めて聴いて以来、常にいつか弾いてみたいと思っていた曲(プログラムノートより)。ゆかりの深いストーリーでその念願が叶い、感慨もひとしおである。接するチャンスが少ない楽曲であっただけに、その意味でも聴き手に鮮烈な印象を残す一夜となった。